

多元的自己再考

——生命システム論から見た現代のこころの在り方についての試論——

篠田 亜美¹

[要約]

本稿では学生相談領域においても話題となることが多い若者の自己の在り方の変化について論じた。日本社会の変遷とその時々の若者の自己やアイデンティティの様相を概観し、1990年ごろよりそれまで青年期の課題として主流となっていた Erikson によって提唱された近代西欧的なアイデンティティの概念が通用しなくなり、多元的自己という概念が論じられるようになったことを確認した。また、精神医学や臨床心理学、社会学、心理学の実証的研究において、多元的自己がどのような概念として捉えられているのかを考察し、システム論を用いて自己を捉えようとする研究も紹介した。そして、多元的自己と表現される現代の青年のこころの在り方を、生命システム論的な観点から、オートポイエーシス (Maturana & Varela, 1980) という概念と、鈴木 (2013) の【膜】、【核】、【網】という概念を用いて捉えることを試みた。生命システム論的な視点によって、現代の青年のこころの在り方が、一貫しているか、多元的かという発想を超える観点を提示できる可能性が示唆された。

[キーワード]

多元的自己, 青年期, アイデンティティ, オートポイエーシス, 生命システム論

1 はじめに

2000年以降、学生相談の分野に限らず青年期のこころの在り方の変化を指摘する議論が増加している。たとえば、渋川・松下 (2010) は「現代の大学生の特徴として、状況依存的で、相手に合わせて意識的・無意識的に変化するあり方」があると述べている。2000年以降の“かつての青年像”とは異なる現代の若者のこころの在り方を考えるにあたって、彼らの「自己の在り方」について改めて考えることは重要と思われる。そこで本稿では、特に1990年代以降に頻繁に議論されるようになってきた“多元的自己”という概念について、これまでの議論を概観した上で、システム論的な視点も取り入れ、“多元的自己”に対する新しい見方を提示することを試みたい。

2 社会の変化と青年の自己・アイデンティティの変遷

2.1 Erikson のアイデンティティ論

青年期において、自己と並んで多くの研究がなされているのが、Erikson (1959) の「identity」である。多元化した自己と、一貫した Erikson 型のアイデンティティとの比較という文脈で、Erikson のアイデンティティ論が引用されることも多い。しかし、自己概念とアイデンティティ概念の混同をはじめとして、アイデンティティ研究におけるアイデンティティ概念の混乱が指摘されている (溝上, 2002)。ここでは、多元的自己を考える上で重要であると考えられるポイントに絞って、Erikson のアイデンティティ概念について振

¹ 学生総合支援機構・学生相談部門・特定専門業務職員

り返る。

溝上 (2016) は, Erikson (1956, 1959, 1963)¹⁾ の「『自我アイデンティティ (ego identity)』の混乱ならびに達成」についての記述を分析し, アイデンティティの確立 (獲得) のプロセスを以下のように説明している。第一の問題は, 「児童期まで無自覚的に行われてきた同一化群を統合する形で『これが私だ』と呼べる自己ラベルを『私』に貼り付けるべく見出さねばならない」ということ, つまり「青年期以前の『私』と現在の『私』の斉一性, あるいはその回復」という「自己アイデンティティ」の問題であり, 第二の問題は「私が『私』に与えた『これが私だ』という自己ラベルと, 他者から見た『私』へのラベルとの『同一』」, しかもこの他者が当人にとっての「価値ある他者」であることによって, その当人が属する「共同体への帰属感」を持つことができるかどうかという「心理社会的アイデンティティ」の問題である。このようにして模索されたアイデンティティは「過去のさまざまな人間にたいする個々の同一視を超越するもの」であり, 「合理的に首尾一貫した, 独特の統一体を形づくってくる」(Erikson, 1968/岩瀬訳, 1973)。ここに二種類の一貫性を見ることができる。個々ばらばらになされた同一化による「私」のイメージを, 「合理的に首尾一貫」するような「私」として練り上げるという一貫性, そしてそれは当人の中だけでなく, 当人が所属する共同体においても共有できるようにするという一貫性である。多元的自己の文脈からは, 後述するように, このような一貫性はもはや現代の日本では成立しないという議論が主流であると言える。

溝上 (2002) は上記に示された Erikson 型のアイデンティティは, 実証的研究という手法で捉えようとする困難が生じるとしている。Erikson のアイデンティティ概念のみならず事物全般における「アイデンティティ概念を用いるのに必須の条件」として, 「事物 (モノや人格, 種々のラベル) の『同一存在を確認』(identify) しようとする文脈のもと扱われている」こと, つまり「同一性を確認しようとする主体の自発的行動」を挙げる。さらにアイデンティティ現象について「『同一』と『差異』の狭間の中で生起する」とし, 「差異の可能性, あるいは同一性の揺らぎがあるからこそ, 同定確認 (identify) をしようとする問いが生まれる」と述べる。上記に述べたアイデンティティ獲得のプロセスは, “これが私といえるのか, 否” という揺らぎ, “これはあの人からも私として認められているのか, いや違うかもしれない” という揺らぎの中で, 自発的にその問題に取り組むという現象を扱うとき, はじめてアイデンティティ概念を扱っているというのである。ここではこの「揺らぎ」や「『同一』と『差異』の狭間」という部分に焦点を当てたい。Erikson がアイデンティティ概念を, その「確立」と「拡散」という対立の文脈の中で提示したことからも, アイデンティティという何か固定的な対象が直線的なプロセスによって形成されていくのではなく, 「確立」と「拡散」の「揺らぎ」がアイデンティティ概念の本質の一角を成すと言えるだろう。確立されたアイデンティティは, 確かに Erikson が述べるように, 「合理的に首尾一貫した, 独特の統一体」(Erikson, 1968/岩瀬訳, 1973) という, 確固とした固定的なものなのかもしれないが, その確立や形成における動的なプロセスも, アイデンティティ概念の一つの重要な側面であると考えられる。

2.2 社会の変化と若者のこころの在り方

自己は単一的なものではなく, 複数の側面を持つことは早くから指摘されてきた。主体としての「主我 (I)」と認識される対象となる「客我 (me)」という側面があることは James, W. (1890) によって論じられ, その後盛衰はありながらも「自己は多面的・能動的でダイナミックな認知構造として理解されるようになり, 多くの理論モデルが提唱された」(洪川・松下, 2010)。本稿ではそのような認知構造よりも, 我々が社会の変化の影響を受けながらこころの在り方が変化する中で多元的であると議論されるようになってきたことに焦点を当てたい。そこでここでは日本の社会の変化とその中で, 青年のこころがどのように捉えられ, そして変化してきたのかを概観する。

2.2.1 1960年代～1970年代半ば（近代西欧的な自己，Erikson 型アイデンティティ）

広沢（2015）は、「急速な社会文化の変化と、それに連動した青年のこころの在り方の変化」について、1960年代から2000年に入るまでを概観している。広沢（2015）は、1960年代頃の青年たちによる反体制運動について「どこか近代西欧的な自己（自立した自己像）を目指したようにも思える」と述べている。その後、1970年代に入ると、「近代西欧的な自己（自立した自己像）を求める姿勢は存在していたものの、それを育むはずの家庭のシステム不全が目立ち、『自己』をめぐる病理が注目され始めた」（広沢，2015）としている。日本における青年心理学の教科書において Erikson の「アイデンティティ形成論が青年期発達の代表的テーマの一つとして当然のように取り上げられるようになる」のが1970年代であり（溝上，2016），広沢の考察とも一致する。社会においても，心理学という学術的分野においても，青年が西欧近代的な自己をどのように確立するのかということが問題となり始めた時期とすることができるだろう。

2.2.2 1970年代後半～1980年代（Erikson 型アイデンティティの陰り）

1970年代後半から1980年代では，モラトリアム人間（小此木，1978），スチューデントアパシー（笠原，1984）といった青年期の心理学的概念がいくつも提唱されるようになり、「西欧の心理学を学んだ精神科医や臨床心理家は，超自我が希薄化し、『社会的な自己の確立』という発達課題を達成しにくくなった青年の心性や精神病理」を追求した（広沢，2015）。そして，この時代はビデオやコンビニエンスストアの普及により時間に縛られずに情報を得たり，買い物をしたりできるようになり「時間性の消失」などから「社会的自己の統一や一貫性への志向性が減じ始めた時代」としている。一方，浅野（2015）は社会学的な知見から，1970年代以降，若者が社会の中でどのように論じられてきたのかについてまとめているが，1980年代は「消費社会的なアイデンティティ」²⁾の時代であり，「何を消費するかによってその人が何者であるのかが示されるようになったという。消費という選択可能なものによって規定される自己は「選択的なもの」となり，「動かしがたい一貫性と同一性を持つものとはいいにくく」なったことが，「自己の多元性へと展開」したと論じている。このような Erikson 型のアイデンティティに代表される一貫性が，若者の間で弛緩し始めたことは，精神医学や心理学的な知見からも，社会学的な知見からも注目された。臨床現場ではやや遅れて1980年代後半になると，1980年代前半までの「全体として一貫性のあるパーソナリティに統合することを理想」とした自己から，「自我の統合性が相対的に希薄で，こころの中の混じると都合の悪い要素は衝立で仕切るように切り離し（それを心理学の用語では『解離』と呼ぶ），ばらばらのまま併存させて」いる（高石，2000）ような自己の在り方へと変化したことが論じられ始める。いずれも，1980年代において若者の自己は一貫性とは異なる方向へと向かい始めたことが顕在化してきた時期として考えられる。

2.2.3 1990年代（一貫した Erikson 型のアイデンティティの本格的な行き詰まり）

1990年代に入ると，パソコンや携帯電話が普及した時代である。広沢（2015）はこのことを「人々の生活が時間のみならず空間にも縛られずに展開し始めた」という特徴に焦点をあて，「とりたてて社会的な自己の統一や一貫性への志向を持たなくとも生きられるし，いわゆる自己の断片化，刹那的な生き方が普遍化し始めた」としている。

浅野（2015）は，1990年代の産業構造の変化，それに伴う労働形態の変化やライフスタイルの変化もまた若者の自己の在り方に変化を及ぼしているという。浅野（2015）は天野（1992）の「自閉主義」という若者のライフスタイルを紹介し，その一つの型である「独身者の機械」では「特定の同一性にとらわれることから逃れ続け」，「何者かとして固定的なアイデンティティを与えられ，その上にピン止めされてしまうことに耐えられない人々の欲望がこのライフスタイルを支える」としている。

アイデンティティと労働との関連は、溝上（2016）によって Erikson のアイデンティティ概念の日本社会への普及という文脈からも論じられている。「子ども・若者を大人の世界から切り離す」学校教育が近代に成立したことによって、切り離された二つの世界を「つなぎ直す作業」が「occupational identity」（Erikson, 1959）であるという。このことが、日本社会でも「職業指導や進路指導と絡んで」おり、「児童期までに外在的基準としての重要な他者（親や教師など）によって形成してきた自己を、青年期に入って、今度は職業領域を含めて、自己基準によって定義し直そうとする」という動きが、戦後しばらくまでの日本の教育と職業選択の在り方になじみやすかったとしている。そして、離転職が一般的となった現代では、Erikson 型のアイデンティティから説明するのは限界があると述べる。

2.2.4 2000年以降（新しい自己のあり方としての多元的自己）

2000年以降になると、インターネットが本格的に社会に浸透した時代と言える。広沢（2015）は、特に「タッチパネル状のパソコン画面」に注目し、「絶えずこの画面と対峙し、いつしかパソコンのシステムの中でわれわれはものを考え、行動するように」なったことが、「自己の構造や機能を変え、タッチパネルのような自己感、世界観すら生まれても不思議ではない」と述べる。そして、この時代の自己に関して、「自己の統一や一貫性への志向が減弱していても、それがある程度容認され、しかもそのようなもとでも機能する何らかの『自己』の在り方」、新しい自己の在り方が顕在化したという。

社会学的には1990年代後半から青年の対人関係が「状況志向化」する傾向が見られ始めた（浅野，2015）。社会調査を通して「多元性が1990年代以降に（も）進行しつつある事態」であり、「自己は単に多元的であるだけでなく、少なくともこの20年間、多元化し続けているように思われる」と述べている。浅野はその後も継続し、最新の2020年の調査においても自己の多元化は進んでいるが、2010年の調査では多元化が適応的な意味をもっていたのに対し、2020年の調査では多元化はある程度までは適応的だが、多元化することが必ずしも適応的であるとは限らないとの結果を示している（浅野，2022）。

2000年以降の心理臨床の分野、特に学生相談の分野では「『悩めない大学生』の増加を指摘するものが多い」（川上，2013）。成田（2001）は「自己の統合を放棄」したところの在り方を指摘し、高石（2009）は、「20世紀のこのころの構造論を元にしたカウンセリングや教育の技法」がもはや通用しないことを指摘している。

2000年以降の自己に関する論考ではおおむね、“一貫した自己”は普遍的なものではなく、特定の年代、社会の元に成立したものであるというのは社会学、心理学共通の見解であると考えられる。

このように、心理学においても社会学においても、1980年代後半ごろから“一貫した自己”というものが崩れ始め、1990年代に本格的にそのことについての議論が行われるようになる。しかし、心理学の考える自己の多元性と、社会学の考える自己の多元性は微妙に異なるように思われる。しかも、2000年以降盛んに行われている、心理学的な立場からの実証的研究では、社会学が焦点を当てている自己やその多元化と、心理学が焦点をあてているそれとが混同されている研究も多い。そこで、次節では、“多元的自己”という概念における、“自己”や“多元性”の定義について論じる。

3 多元的自己の定義

前章で見てきたように、多元的な自己についての論考は、主に社会学の分野と精神医学や心理学の分野がある。この二つに加えて、心理学でも統計的な手法を用いて青年の自己の多元化を確認する実証的研究の分野も存在する。そして、それぞれの分野において、“自己の多元性”をどのように捉えるのかが異なったり、アイデンティティと自己の区別が混同されたりする。

3.1 アイデンティティを包括する概念としての自己

浅野（2016）は、自己（self）はアイデンティティの「前提となる」ものと述べ、「アイデンティティというのは社会的には自己がとり得る形の一つ」としている。溝上（2016）は、「自己形成」とは「自己を主体的に、個性的に形作る行為」（溝上，2011）であり、「アイデンティティ形成」はそのような自己形成の中で『これが私だ』という自己定義の模索、それを連続的・心理社会的に確立しようとする形成を指す概念」としている。これらの記述から“自己”とは“アイデンティティ”を包括する概念と考えられる。

また、臨床心理学の分野においては多元化した自己は「こころの断片化」（高石，2009；桐山，2010など）と表現され、広沢（2015）では現代の青年の自己の問題を「こころの構造」という観点から考察している。臨床心理学の分野において自己の多元性（断片化）と関連して論じられる自己とは“こころ（の構造）”という意味で用いられていると考えられる。

3.2 多元的な自己における，“自己”と“アイデンティティ”の混同

Erikson のアイデンティティ概念とは、2.1で確認したように、「合理的に首尾一貫した、独特の統一体」（Erikson, 1968／岩瀬訳，1973）であり、西欧近代型の一貫した自我や主体を前提としている。前節で確認したように、1990年代以降の日本でその喪失や崩壊が議論されたのは、このようなErikson型のアイデンティティであった。その議論の中からErikson型のアイデンティティという形で統合されない自己を“多元的自己”と呼ぶようになった流れがある。

心理学の実証的研究ではこのアイデンティティと自己の概念の混乱が見受けられる。木谷・岡本（2018）や藤野（2022）では、「多面的な自己に葛藤を抱かない青年」が「どのようにアイデンティティを形成しているのか」（木谷・岡本，2018）を問題としているが、そもそもの議論では「多面的な自己に葛藤を抱かない」とは、Eriksonのアイデンティティのように一貫した自分というものを目指さないということではなかったのだろうか。天谷（2019）は、木谷・岡本（2018）論文への意見論文においてこの点を指摘しているが、その指摘へのリプライ論文（木谷・岡本，2019）での返答でも、「『アイデンティティ』という用語は多様な要素を含む包括的な概念」とし、「自己」は「アイデンティティの統合の状態を捉える視点」としており、浅野（2016）や溝上（2011，2016）の論考から読み取れる、自己がアイデンティティよりも包括的な概念であるという見方とは逆転しているように見受けられる。

3.3 多元的自己の“多元性”とは

また、“多元性”についても検討の余地がある。社会学の実証研究においては、辻（1999）は、その当時の「若者ことば」と、対人関係に拘束されずに複数の対人関係においてそれぞれ「切り替え^{フリッピング}」する傾向との関連を示している。この研究を皮切りに辻（2004）、岩田（2006）、浅野（2015，2016，2022）などでも、場面や状況において、意識的に自分を切り替えることがあるか、それとも自分は一貫していると考えているか、質問紙調査での回答を元に多元性を判断するという観点で概ね一致している。心理学においては、藤野（2022）が、それまでの自己の多元性の実証的研究において、多元性という用語の定義が曖昧であることを指摘し、「状況に応じて複数の異なる自己を振る舞い分ける自己の在り方」を「自己の多元性」として定義している。そして、「状況によって複数の切り替わる」という現象を、「意識的自己切替」「無意識的自己切替」「自己不変」という3つの側面から捉えようとしており、“無意識的な”切り替えが含まれるようになった。それまでの心理学的実証研究では社会学分野における先行研究が参照されているため、意識的な切り替えに焦点が当てられている。

その対極的な観点から自己の多元性を捉えているのが、精神医学や臨床心理学的な視点である。成田

(2001) は、相手に応じて異なるバージョンに「自動的に」切り替わる青年の在り方を描写し、無意識的な切り替わりに焦点が当たっている。また、渋谷・松下 (2010) は、「変動性」「多面性」という用語で一つに統合されていない自己を表現しており、「変動性」は「状況や対人場面間における自己認識や自己概念の変動性」のことであり、「多面性」は「自己知識・自己概念の分化の程度やその内容の幅に着目」しているものを指すとして、この二つの概念は関連した概念のため区別せずに包括的な視点で考察している。いずれも、意識的な切り替えというよりは、無意識的なものも含めたこの在り方全般のことを指していると考えられる。

そして、「切り替え」や「変動性」という言葉から、自己の多元性には“動き”という要素も重要ではないかと考えられる。次節では、“動き”に焦点を当ててシステム論を用いて自己を論じている研究を取り上げる。

3.4 システム論を取り入れた多元的自己

杉浦 (2017) は、「多元的循環自己」という概念を提唱している。この概念は、「物語自己」(Anderson & Goolishian, 1992/野口・野村訳, 1997; 浅野, 2001など) という概念に、Bateson (1972/佐藤訳, 2000) のシステム論に基づいた自己の考え方を加えた「物語自己の発展版」と位置付けられている。「循環によって立ち現れる自己、システムとしての自己」と説明されており、“動き”に焦点を当てた概念であると考えられる。「多元的循環自己」は、「他者とのコミュニケーションも含めた様々な行動とその結果のフィードバックの記憶が循環の軌跡の重なりを形作ることによって、その輪郭が自己として認識される」。たとえ「思い込み」であっても、その人にとっての「物語的な現実」によって自分自身を理解し、その理解に基づいた言動を行った「結果のフィードバック」によって一つの「循環」が作られる。つまり「循環」という“動き”によって自己が現れるという。裏を返せば、“動き”のないところに自己を見出すことはできないということになる。

このモデルでは、Erikson が同一化によって作られると考えた自己イメージが、「物語」によって作られると考える点、Erikson 型のアイデンティティでは最終的に「自己のラベル」(溝上, 2002) として一つに統合されるところを、それらが複数併存する点では Erikson 型のアイデンティティと確かに異なる。しかし一方で、そこに語る私という確たる主体が想定されることや、物語によって構成される自己概念は、「思い込み」であってもよいという点では「あくまで対象全体の主観的『見え』が問題」(溝上, 2002) となるような「同一性」を問題にしており、あくまで Erikson 型のアイデンティティ概念の延長として位置付けられるのではないかと考えられる。

「多元的循環自己」では、社会学や心理学的実証研究で複数の自己の「切り替え」としてしか表現できなかった自己の多元性を「循環」というシステム論的なモデルを用いて描き出し、「自己(形成)は外に開かれた動的なプロセスとしてとらえることができる」(杉浦, 2017) という点が重要であると考えられる。

システム論的な自己の考え方として、山田 (2005) の論考が挙げられる。山田は、1970年代以降発展した自己研究は「自己を多元的、階層的にとらえようとするもの」であり、「視点は階層的なものから構成的なものへ、次元はトップからボトムへと移っていった」と述べている。特に Hermans ら (Hermans, Kempen & van Loon, 1992) の提唱した、「最も基底となる自己現象が複数の私 (posetions) として変換・付置され、それらの対話的關係によって自己の世界が構成される」という考え方を採用したうえで、その「最も基底となる自己現象」がどのように生起するのかということを、複雑系やシステム論の考え方をを用いて説明を試みている。

山田 (2005) は、多元化した自己を捉えようという立場ではなく、そもそも自己というものがすでに「多

元的、階層的」な性質を持つという立場から自己形成を論じているが、自己を一つの生命システムとして捉え、自己形成を記述する方法としてシステム論の考え方を採用しているためここで取り上げた。本稿でも自己を“一つの生命システム”として捉える立場に立ちたい。節を変えて、本稿で対象とする、多元的自己を改めて提示する。

3.5 本稿における多元的自己

ここまで見てきたように、自己が多元的であるということ自体は現代特有の事柄ではないことがわかる。一方で日本社会では、1970年代ごろ Erikson によって紹介された青年期に達成すべき課題としてのアイデンティティ確立という考え方が徐々にスタンダードになった。しかしそのようなアイデンティティ確立の課題は、1990年代ごろから通用しなくなり、“多元的”、“多面的”、“変動的”な自己という考え方が広まった。本稿では、日本社会の中で、Erikson 型のアイデンティティとの比較、差異によって議論されるようになってきた多元的自己、つまりは Erikson 型のアイデンティティ概念の崩壊の先に位置づけられる、社会や臨床現場で捉えがたいものとして注目された青年のこのころの在り方を、“多元的自己”として考えることとする。

心理学的実証研究の分野、社会学の分野では、多元的自己の研究は自己が多分化しているのか、それは健康的ではないことなのか、という視点が主流であると考えられる。臨床心理学の分野においては、これまでの心理学的概念やカウンセリングの技法では、対応しきれないと感じられるクライアントの背景に、自己の多分化があると考え、どのように支援できるのかということが主な焦点になっていると考えられる。

“多分化”は、Erikson 型の“一貫した”自己という概念との対比であり、Erikson 型のアイデンティティの概念が現代の日本社会では立ち行かなくなったことが明らかになりつつも、これまでの議論では結局のところ Erikson 型のアイデンティティと、その通底にある西欧近代的な視点から抜け出せていないように思われる。広沢（2015）は現代の大学生を捉える、近代西欧型自己とは別の見方として、「このころの原図」としての「放射型」と「格子型」という類型を提示し、それぞれに固有の発達の仕方があり、その固有の発達を尊重した対応をすることを提案している点で、西欧近代型自己とは異なるこのころの構造を提示している。しかし、その構造について議論するだけでは、このころは静的なものとして捉えられてしまい、より社会が高度に情報化され流動化していく変化に耐えられないのではないかと考えられる。田中（2017）は、「このころの構造」という考え方自体が成立しなくなってきたことを論じ、心理療法というものの在り方について、「今のような心理療法の現状を単に外側から被ったものとしてではなく、むしろ心理療法の運命や自己展開としてよく認識」する必要性を述べている。この記述は心理療法についてではあるが、“このころ”そのものや“自己”についても同様に、「外側から被った」状態ではなく「自己展開」してきた結果今の在り方となり、そしてこの先も「自己展開」するものとして捉える必要があると考えられる。そのためには、展開し続ける自己の一瞬一瞬を、静止画のようにとらえてその構造を記述する方法ではなく、動きそのものを記述する視点が必要ではないだろうか。そこで本稿で論じようとする多元的自己の“多元性”とは、次のようなものとして考える。なにか複数の次元や因子を想定し、それらが多層的に存在するような構造を考えるのではなく、それ自体が自己展開するものであり、それを観察する際に結果として多元的なものとして捉えられるという意味での多元性である。そして、自己をそのような自己展開するものとして見るために、我々人間も他の生物と変わらない一つの生命であることを重視した立場に立ち、多元的自己を生命システムとして考える。さらに、そのように展開し続けるシステムを記述する方法として、オートポイエシス（Maturana & Varela, 1980/河本訳, 1991）という理論構想と、鈴木（2013）による【膜】、【核】、【網】という考え方を導入して、多元的自己について考察する。

4 生命システムの延長としての多元的自己

4.1 オートポイエーシスという考え方

オートポイエーシスは、Maturana と Varela によって考案されたシステム論である (Maturana & Varela, 1980/河本訳, 1991)。河本 (2000) によると、「オートポイエーシス」とは「ギリシャ語からの造語であり、オート (自己) とポイエーシス (制作)」の組み合わせである。「着想段階では、神経システムをモデルとして形成された生命システム」であり、生命の基本を「それじたいみずから行為を継続するもの」としている (河本, 2000)。つまり、生命の目的をその生命の外側に求めるのではなく、「自己維持するネットワークにすぎない」(鈴木, 2013) と考える。

このように言ってしまうと単純で味気ないもののように聞こえるが、オートポイエーシスによって描かれる生命は、「みずから行為することによって作り出される多元的世界を形成する。それはみずから多元的であることを知ることなく形成する世界である」(河本, 2000) という性質を持ち、その拡張によって、河本 (2000) は、「心的システム」、「身体システム」、「社会システム」などをこの理論の機構を用いて説明している。ここでは、オートポイエーシスの特徴の中でも以下の二点に注目したい。一点目は、この生命システムは「作動の継続」(言い換えると「行為の継続」) によって「自己維持」するシステムであるという本質である。自己は本来“動的な”ものであり、先行研究における多元的な自己も、特に状況によって切り替わるという面が重視されているものが多い (例えば、辻, 1999; 藤野, 2022)。しかし、動的なものを議論の対象として言語によって抽出することは難しく、「切り替え」という言葉を用いて静的なものとの連写として描き出すか、「トートロジー」として描き出す (杉浦, 2017) などの工夫が行われてきた。オートポイエーシスは、「作動の継続」を生命システムの本質に置くことで、“動き”をこれまでとは異なる方法で描き出そうとしている。

もう一点目は、このシステムが徹底して、システムを作動させる行為者³⁾の側から描かれるものであるという点である。渋谷・松下 (2010) は、自己の変動性・多面性の研究に関して「変化する主体である個人が、自分の変動性・多面性をどのように捉え、体験しているのかという“主体的な側面”」という視点の重要性を述べている。そのような内側からの視点を、オートポイエーシスのようなこれまでとは異なる枠組みから描き出そうとする試みもまた、新たな示唆につながると考えられる。

4.2 【膜】、【核】、【網】という考え方

複雑系、自然哲学を専門とする鈴木 (2013) は、「人間が細胞から構成された動物であり、生態系の一部として進化的な位置づけをもった生命のひとつである」という地点から出発し、社会システムを生命システムの「進化的展開」と述べる。そして、生物学的な起源をもつ、【膜】と【核】という社会現象が生命史の中で繰り返し現れていることを示している。「【膜】の現象」とは、国や地域による「資源の囲い込み」などに代表されるように、内と外を分けることで起こる社会現象であり、主に「所有」と関わる。それは、細胞膜の内側が主体、外側が環境というように、「世界から内部と外部を分離する」ことに生物学的起源をもつ。「【核】の現象」とは、中央集権的な組織によって社会が「制御」されることなどに見られる現象である。生物学的起源は DNA とタンパク質の関係にみられるという。「タンパク質の構造は DNA のデジタルな情報から生成されている」という「書くもの」= DNA と「書かれるもの」= タンパク質として役割分化がなされる。つまり「DNA は制御するほうに、タンパク質は制御されるほうにすみ分けられる」。タンパク質は DNA よりも複雑なダイナミクスを持ち、DNA によるタンパク質の制御は、小自由度による大自由度の制御と考えられるという⁴⁾。これが【核】の原理である。また、鈴木 (2013) は、池上と橋本 (Ikegami & Hashimoto, 1995) を引用し、「タンパク質の構造を記述しているのは DNA であると同時に、その DNA を

書くのはタンパク質である」という循環関係にあることから、小自由度で大自由度を制御するというシステムは、そのように見せている「見せかけ」であるともいう。これが【核】の現象の本質である。

鈴木は、このような【膜】と【核】の構造は、単細胞レベル、多細胞レベル、他者レベル、社会レベルで反復的に起きているという。そして大事なのは、このような「膜と核を生み出すのは背景にある複雑な反応ネットワーク」であり、これを【網】と名付けている。「網こそがこの世界の本性であって、膜や核は仮の姿としてあるいは一時的な現象として生まれてくる」と述べる。

さらに、鈴木（2013）は、コンピュータやメディアも【核】、【膜】、【網】という視点から考えている。コンピュータをどのようなものとして捉えるかという概念の変遷では、1995年からの、「世界のあらゆる現象がネットワークでつながり、ひとつのコンピュータをつくりあげる」と考えるネットワーク主義の時代は、【網】の現象と対応しているという。また、メディアにおいても、現代の主流になっている、インターネットメディアは【網】的だと述べている。ラジオや新聞、テレビなどのマスメディアは、音声や文字、動画などのコンテンツを配信する代表的なメディアでは、発信する側と受信する側が分かれ、発信する側という小自由度によって、一般大衆という大自由度を制御するという意味で【核】的であり、同じ受信装置を持つ人々のうちでしかその情報のやり取りがなされない、つまり同じ受信装置を持つ人々という膜の内に情報を囲い込むという点で【膜】的なメディアだということ。一方、インターネットは「中心的な制御システムをもたずに運用され」、「自律分散協調的」であるという。インターネットを介したソーシャルメディアは、「誰もが情報発信できて誰もが受信者になることができ」、かつ「どの情報が直接の知人だけでとどまりどの情報が世界中に波及するかは、実際に発信されてみるまでわからない⁵⁾。そして、そのような「インターネットが社会に普及したことにより、人々が世界を見る視点がネットワーク思考になっている」と述べている。広沢（2015）は、インターネットやパソコンの普及により、タッチパネル式の画面が、人々の自己の在り方にも影響を与えていると論じているが、そのようなメタファーは、パソコンの性能に応じて一定量の情報を囲い込む【膜】の原理と、その囲われた情報とそのコンピュータの処理能力によって行える操作が制御されるとい【核】の原理で説明できる。しかし、現代社会におけるインターネットの普及、そしてソーシャルネットワークの普及の本質は、そのような【膜】や【核】の原理ではなく、その背景にあるネットワークである【網】の原理に目を向けなければ、そこから受ける我々のこころの在り方の変化は捉えがたいと考えられる。

4.3 オートポイエティックなシステムとして描く自己

ここでは、これまで“多元的自己”という呼び方で示されてきた現代社会における自己を、上記のオートポイエシスという理論と、鈴木（2013）による【膜】、【核】、【網】という考え方を下敷きに、新しく描き出すことを試みたい。

まず、Eriksonのアイデンティティ概念に代表される一貫した自己は、【核】の原理から説明されると考えられる。つまり、「過去のさまざまな人間にたいする個々の同一視を超越する」ような「これが私だ」と言える自分のラベル（溝上、2016）が【核】であり、そのような一貫した自己、つまり小自由度である【核】によって、“私”という有機体（言葉通り、身体も含めた、私という生物としての人間）の大自由度を制御している。そのように確たる自我を持って自分をコントロールできるようになることが、大人の社会へと参入していく青年期の課題としてみるのが、近代西欧的なものの見方であった。次に、社会学や心理学の実証研究における「多元的自己」とは、状況によって意識的に切替えられる自己の在り方であったが、これも本質的には【核】の切り替えとして考えられるだろう。特に、社会的な文脈で見られる多元的自己は、「意識的な」切り替えを主に扱っており、その切り替えを行う「意識」こそ、切り替えを制御する【核】として捉えることができ、【核】による制御が階層的になっていると捉えることができるのではないだろうか。一方、

精神医学・臨床心理学の分野では、「無意識的に」状況依存的な多元的自己も論じられていた。これは【核】において、小自由度による大自由度の制御が見せかけであるということから説明できる。【膜】の内側は、一つの【核】によって制御されているという前提がある。【膜】の内側で起こる、つまり私に関わることで起こることは、【核】である一貫した自己によって統制されているという“見せかけ”が働く。“見せかけ”の制御が実際には起こってなかったことが顕わになり、自己の断片化として捉えられたのではないかと考えられる。しかし、この現象に関しては、オートポイエーシスという考え方を導入することでよりよく説明できると考えられる。

オートポイエーシスは、「作動の継続」、「自己維持」それ自体が目的である。“なぜ”という問いが存在しない。多元的自己も一つのシステムであり、オートポイエーシスという考え方から捉えられるとすると、“なぜ多元化するのか”という問いが無用になる。社会というシステムの中で、人間が生命活動を続け、自己というシステムが作動を継続した結果そのようになったのである⁶⁾。“なぜ”ということを考えようとする、一貫した自己との比較が生じ、いつまでもその枠組みから抜け出られなくなるからである。“なぜ”ではなく、“どのように”多元性を記述するのが重要だと考えられる。ここでオートポイエーシスの「システムは特定の空間内に実現していく」（河本，2000）という性質を考えてみる。「空間内に実現することとみずからの内と外を区分することは同一の事態の二つの面」であるという（河本，2000）。このことを河本は、自転車に乗る行為を使って説明している⁷⁾。初めて自転車に乗るときに、転んだり、うまくいったりを繰り返しながら、「自転車に乗る行為の中ではじめて新たな身体的自己が形成させる」が、この時の身体的自己は、「特定の空間内を作動するものでない」という。この時に想像される物理的空間は、「観察者が眼前に開けている空間内に行為者を想定しているだけ」だという。オートポイエーシスでは徹底して、行為者からの視点で記述しようとするので、「行為者は行為の継続をつうじてみずから自身の固有空間を形成するのであって、予め設定された空間のうちの行為者ではない」という。つまり、多元的自己の状況依存的であるということの見方が変更される。先に何らかの状況、場があるのではなく、その人がそこで行為を継続することによって、その人の固有空間が開ける。大学、サークル、アルバイトなどの活動の場によって自分が違うかどうかを問う研究（木谷・岡本，2018）もあるが、それはある属性でメンバーを囲むという、つまり所属という【膜】の発想になる。しかし、ソーシャルネットワーキングサービス（Social Networking Service: SNS）上の人間関係の切り開かれ方はそうではない。「～～に所属しよう」、「～～に参加しよう」と SNS に登録するのではなく、投稿、検索、閲覧、返信、ダイレクトメッセージというような行為を繰り返す中で、別のアカウントとの交流が始まったり、始まらなかったりする。このようにして自己が行為する空間が出来上がるのである。そして、その行為を継続するなかで、ある人間関係は解消されるかもしれないし、別のメンバーが加わり形を変えるかもしれない。そのようにして、ただ SNS 中の行為が継続していく。

また、「行為」に焦点を当てると、SNS の中で実際に具体的なコミュニケーションに至らない、検索と閲覧を繰り返すという場合にも焦点を当てることができる。社会学的な視点や、心理学の実証研究的視点では、多元的自己の「切り替え」に焦点を当てていたため、具体的な他者が想定され、人間関係が生まれている場での“私”というものに限定されがちだった。しかし、SNS にあふれる情報、様々な主義主張に対して、検索、閲覧が繰り返されれば、ある一定の方向を持った情報や主義主張を検索、閲覧するという自己の固有の空間が開ける。この時、意識的か無意識的かという問い自体が意味をなさないだろう。それは SNS 中で行為を続ける主体の側からの視点ではなく、観察者の視点になってしまうからである

このように SNS において自己が行為の継続によって自己維持する様子を描き出すと、一貫しているか、多元的なのかという問い自体がそぐわないと言える。ただ行為の継続があるだけということになる。そして、行為者は自らの行為の結果に対して、目的や結果を予測しない。目的は、行為の継続でしかない。このこと

によって、精神医学や臨床心理学の分野で対象としていた多元性も説明出るのはないかと考えられる。そして、このシステムを観察者の視点、つまり外部からの視点から見れば、多元的かもしれないし、もしかしたら一貫しているかもしれない。しかしそれだけの違いであって、一貫しているか、多元的かどうかといった、自己の構造を本質としないのがオートポイエーシスの考え方である。

5 おわりに

5.1 ネットワーク的な社会の中で生成するネットワーク的な自己

本稿では主に1970年代以降の日本社会の変遷と、それに伴って、青年期のアイデンティティ論や自己論が変化してきた様相、その中で1990年代以降の、一貫したアイデンティティや自己の喪失とそれらが多元化化してきていることに関する研究を取り上げた。そして、現代における自己と捉えるには、ネットワーク化した社会という視点や、システム論的な考え方が有用であるということ、オートポイエーシスの理論と、鈴木【膜】、【核】、【網】という概念を用いて考察した。

鈴木（2013）は、生命システムの本質は、【網】的なネットワークであり、「膜や核は仮の姿としてあるいは一時的な現象として生まれてくる」としつつ、「膜や核は、世界の複雑さからのその存在を守ろうという自律的システムの進化」によるもので、「世界の複雑さと折り合うための重要な手法」でもあるという。鈴木はそれでも、【網】的な原理を元にして、「複雑な社会を複雑なまま生きる」ような社会システムの構想を提示し、そのことによってさまざまな社会問題にアプローチすることを試みている。

自己に関してはどうだろうか。ネットワーク的な社会において、自己もネットワーク的なものとして捉えられるようになってきていると考えられる。そのような自己が現にあるとして、それは生きやすいのか、生きづらいのか。臨床心理学の分野ではそのような青年が「悩めない」（渋谷・松下，2010）、「とらえどころがない」（広沢，2015）と表現されてきたが、広沢（2015）は、「とらえがたい」と感じるのは、臨床家が主に依って立つ精神医学・臨床心理学の概念が、「主に近代西欧型自己という特定の自己像を基準に」しているからであると考察している。ではネットワーク的な自己を想定すれば、学生相談に来談する青年たちの悩みやこころが捉えられるのだろうか。このネットワーク的な自己という発想は、これまでの自己やアイデンティティの概念に代わる新しい概念の提示とは異なり、思考の形式、システムを想定するという試みである。つまり新しい概念を持ち込むことや、既存の概念の変更ではなく、思考様式の変更である。これまでのように、臨床現場で出会うクライアントの心の有り様の本質や共通性を抽出して一定の構造をもった概念を構築していくのでは、現代社会の多様性と変化のスピードにはもはや耐えられないのではないだろうか。常に作動を続け、ネットワーク的に自己が展開していくため、極端に言えばもはや既存のものは展開しないという前提が生まれる。社会が流動的になり多様化すればスタンダードがなくなっていく。そのような社会での適応をスタンダードであるかそうではないかという見方で、（例えば、Eriksonのアイデンティティを確立できるかどうかというような見方で）、考えるのは限界がある。ネットワーク的な自己、とりわけオートポイエーシスという考え方をを用いることは、徹底してシステムの作動に不具合がないか、自己維持ができるかどうかという視点で考える。「悩めない」、「語れない」などの否定的な見方ではなく、ここで作動しているシステムがうまく機能することを目指す。そのような視点を持つことは、学生が抱える固有のつまずきから、これまで以上にその人固有のやり方で回復したり、成長したりする可能性につながると考えられる。河本（2000）はオートポイエーシスを理解することは、「経験の仕方」を変えることであると論じているが、多様化してスタンダードが消失しつつある現代社会においては、自己の新しい概念ではなく、新しい思考様式が臨床家の拠り所となると考えることはできないだろうか。このようなネットワーク的な自己の有用性を、実際の事

例に即して、より具体的に論じることが今後の課題である。

最後に項を改めて今後の課題について論じる。

5.2 今後の課題

今後の課題の一点目は前項で述べたように、ネットワーク的な自己という考え方をを用いて、学生相談などに来談する青年たちのこころの在り方をより具体的に示すということである。実際の事例に根ざした説明が必要であると考えられる。

二点目は、オートポイエーシスという理論の説明が不十分ということである。河本(2000)によると、オートポイエーシスの理論的定式はひとつに定まらない。その理由は、それが形成途上であるからではなく、「オートポイエーシスの機構の定義は、変更可能なものであり、またそれを欠くことができない」という性質にあるという。そして、「オートポイエーシスは知識として身につけるだけでは、この構想にはまったく釣り合わない」、「この構想は使えなければならず、使うことによって固有の世界へと入っていけなければならない」という性質のものだという。これを河本(2000)は「経験の仕方を変える」という言い方をしている。これからの、こころの在り方を考えるとき、「経験の仕方を変える」という根本的な姿勢の変更は有用であると考えるが、それがどういったことを指し示すのか丁寧に論じていく必要がある。今後、現代の自己の在り方をオートポイエーシスの考え方をを用いてより具体的に描き出す必要があるだろう。

[注]

- 1) 溝上(2016)は、英語原著を参照しているため、文献一覧には原典を示したが、本稿の本文中では溝上(2016)での訳を使用した。
- 2) 浅野は別稿(浅野, 2016)で、「アイデンティティは社会的には自己がとり得る形の一つ」であり、Eriksonの「人間にとって普遍的な自己のあり方」として用いているアイデンティティとは区別していることに注意が必要である。
- 3) ここでいう行為者とは人だけでなく、細胞や植物など様々な水準を含むと考えられる。そして、河本(2000)で示されているように、「オートポイエーシスの拡張」によって、「心的システム」、「身体システム」、「経済システム」もオートポイエーシスによって説明可能である。
- 4) 自由度とは、「自由に変更できる変数の数のこと」。「大自由度なシステムとは、互いに変数が影響を与える複雑な系」(鈴木, 2013)
- 5) ただし、インターネットが本来的に中心的な制御システムをもたないからといって「現実もそうなるだろう」というほど物事は単純ではない。実際にはインターネットの上に膜や核を作り出すことが、アーキテクチャ的に自由にできる」(鈴木, 2013)のであり、身近な例でいえば、公開範囲の設定や友人申請などによって、自分が発信する情報公開の範囲を膜的に囲い込むことができる。
- 6) オートポイエーシスでは、このように異なる複数のシステムが密接に連動することをカップリングと呼んでいる。カップリングではどちらかのシステムがどちらかを引き起こすという因果的な思考や、そこに媒介するものを想定せず、それぞれのシステムが一貫して作動し続けるが、そこに密接な関係が見いだされるという現象である(河本, 2000)。
- 7) 自転車に乗る行為は、前の一漕ぎが次の漕ぎだしを引き出し、その行為の連続によって成立する動作であることから、オートポイエーシス的であると考えられる。

【文献】

- 天野義智. 繭の中のユートピア——情報資本主義の精神環境論. 弘文堂, 1992, 226.
- 天谷裕子. 単でない自己・アイデンティティの様態をどのように捉えるか? ——木谷・岡本論文へのコメント——. 青年心理学研究. 2019, 30, 165-169, https://doi.org/10.20688/jsyap.30.2_165, (2022年8月17日).
- Anderson, H., & Goolishian, H. "The client is the expert". *Therapy as social construction*. Mcnamee, S., & Gergen, K.J. Sage Publication, 1992, 25-39.
- (野口裕二・野村直樹訳. "クライアントこそ専門家である——セラピーにおける無知のアプローチ". ナラティブ・セラピー——社会構成主義の実践. 金剛出版, 1997).
- 浅野智彦. 自己への物語論的接近——家族療法から社会学へ. 勁草書房, 2001, 194.
- 浅野智彦. 「若者」とは誰か——アイデンティティの30年【増補新版】. 河出書房, 2015, 244.
- 浅野智彦. "流動的社会の中のアイデンティティ". 現代社会の中の自己・アイデンティティ. 梶田観一・中間玲子・佐藤徳. 金子書房, 2016, 86-105.
- 浅野智彦. 大学生における自己の多元化とその規定要因. 東京学芸大学紀要. 自分社会科学系. II. 73, 119-133, <http://hdl.handle.net/2309/00173539>, (2022年6月17日).
- Batson, G. *Steps to an ecology of mind——Collected Essays in Anthropology, Psychiatry, Evolution, and Epistemology*. Chandler Publishing Company, 1972, 533.
- (佐藤良明訳. 精神の生態学 (改訂版). 新思索社, 2001, 706.)
- Erikson, E. H. The problem of ego identity. *Journal of the American psychoanalytic Association*. 4, 1956, 56-121.
- Erikson, E. H. *Identity and the life cycle*. New York: W. W. Norton., 1959, 171.
- Erikson, E. H.. *Childhood and society*. (2nd ed.) New York W. W. Norton, 1963, 445.
- Erikson, E. H. *Identity, youth, and crisis*. New York W. W. Norton, 1968, 336.
- (岩瀬庸理訳. アイデンティティ——青年と危機. 金沢文庫, 1973, 488).
- 藤野遼平. 現代青年における自己の多元性の分類とアイデンティティの関連. 青年心理学研究. 2022, 33, 87-104, https://doi.org/10.20688/jsyap.33.2_87, (2022年8月17日).
- Hermans, H.J.M., Kempen, H.J.G., & van Loon, R.J.P. The dialogical self: Beyond individualism and rationalism. *American Psychologist*, 1992, 47, 23-33.
- 広沢正孝. 学生相談室からみた「こころの構造」——〈格子型／放射型人間〉と21世紀の精神病理. 岩崎学術出版社, 2015, 172.
- Ikegami, Takashi & Hashimoto, Takashi. Coevolution of machines and tapes. *Advances in Artificial Life*, 1995, 234-245.
- 岩田考. "若者のアイデンティティはどう変わったか". 検証・若者の変貌——失われた10年の後に——. 浅野智彦. 勁草書房, 2006, 151-190.
- James, W. *Principles of psychology*. Henry Holt and Company, 1890, 1393.
- 笠原嘉. アパシー・シンドローム——高学歴社会の青年心理. 岩波書店, 1984, 318.
- 川上華代. 現代学生の特徴と学生相談についての一考察. 和光大学現代人間学部紀要, 2013, 6, 141-153, <http://id.nii.ac.jp/1073/00001945/>, (2022年8月18日).
- 河本英夫. ワードマップ オートポイエーシス——日々新たに目覚めるために. 新曜社, 2000, 318.
- 桐山雅子. "現代学生の心理的特徴". 学生相談ハンドブック. 日本学生相談学会50周年記念変種委員会. 学苑社, 2010, 69-76.
- 木谷智子・岡本裕子. 自己の多面性とアイデンティティの関連. 青年心理学研究. 2018, 29, 91-105, https://doi.org/10.20688/jsyap.29.2_91

doi.org/10.20688/jsyap.29.2_91, (2022年8月19日).

木谷智子・岡本裕子. 自己の多面性とアイデンティティ研究に対する今後の課題——天谷氏・齋藤氏のコメントに対するリプライ——. 青年心理学研究. 2019, 30, 174-178, https://doi.org/10.20688/jsyap.30.2_174, (2022年8月18日).

Maturana, H. R., & Varela, F. J. *Autopoiesis and cognition: The realization of the living*. Springer, 1980, 176.

(河本英夫訳. オートポイエーシス——生命システムとはなにか——. 国文社, 1991, 320.)

溝上慎一. “アイデンティティ概念に必要な同定確認 (identity) の主体的行為——実証的アイデンティティ研究の再検討——”. 自己意識研究の現在. 梶田叡一. ナカニシヤ出版, 2002, 1-28.

溝上慎一. 自己形成を促進させる自己形成モードの研究. 青年心理学研究. 2011, 23, 2, 159-173. https://doi.org/10.20688/jsyap.23.2_159, (2022年9月28日).

溝上慎一. “青年期はアイデンティティ形成の時期である”. 現代社会の中の自己・アイデンティティ. 梶田叡一・中間玲子・佐藤徳. 金子書房, 2016, 21-41.

小此木啓吾. モラトリアム人間の時代. 中公叢書, 1978, 343.

成田善弘. “若者の精神病理——ここ二十年の特徴と変化”. 〈こころ〉の定点観測. なだいなだ. 岩波新書, 2001, 1-18.

洪川瑠衣・松下姫歌. 大学生における自己の変動性・多面性の概念について——学生相談における臨床的理解と意義の視点から——. 広島大学心理学研究第. 2010, 10, 171-183, <http://doi.org/10.15027/31315>, (2022年9月1日).

杉浦健. 多元的自己の心理学——これからの時代の自己形成を考える. 金子書房, 2017, 187.

鈴木健. なめらかな社会とその敵——PISCY・分人民主義・構成的社会契約論. 勁草書房, 2013, 266.

高石恭子. “ユース・カルチャーの現在”. 大学生がカウンセリングを求めるとき——こころのキャンパスガイド. 小林哲郎・高石恭子・杉原保史. ミネルヴァ書店, 2000, 18-37.

高石恭子. 〈高等教育の動向〉現代学生のこころの育ちと高等教育に求められるこれからの学生支援. 京都大学高等教育研究. 2009, 15, 79-88, <http://hdl.handle.net/2433/97912>, (2022年8月18日).

田中康裕. 心理療法の未来——その自己展開と終焉について. 創元社, 2017, 305.

辻大介. “若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア”. シリーズ・情報環境と社会心理3 子ども・青少年とコミュニケーション. 橋本良明・船津衛. 北樹出版, 1999, 11-27.

辻大介. 若者の親子・友人関係とアイデンティティ: 16~17歳を対象としたアンケート調査の結果から. 関西大学社会学部紀要. 2004, 35, 2, 147-159, <http://hdl.handle.net/10112/00022294>, (2022年8月17日).

山田剛史. “システム論的自己形成——複雑系とオートポイエーシスの視点から——”. 自己意識研究の現在2. 梶田叡一. ナカニシヤ出版, 2005, 183-202.

(受理: 2022年9月12日 受稿: 2022年10月10日)